

ほんものは続く 続けるとほんものになる

体育大会が無事終了しました。あまり私見を書きすぎると、先生方の振り返りに影響を与えてしまうので、深入りはしません。開会式で目標達成の向こうにある目的に気が付きながらの取組になりつつある、と言いました。是非とも、生徒の振り返りの中で、「勝ってよかった」「負けて残念だった」ではなく、学級にどんな力がついたか、そして新たな課題は何かを明確にしてください。禅問答のようなことを言いますが、体育大会は成功しましたが、真の成功は、日常生活に表れます。ついた力を更に伸ばし、見えてきた課題を日常生活の中でこそ克服・改善することが学級・学年経営の醍醐味です。

閉会式では、当初講評をしようと思っていましたが、これも各学級・学年に任せます。ただ素直に「体育大会ができてよかったなあ」「成功してよかったなあ」「成功の裏に多くの人のがんばりや支えがあったなあ」と感じ、「四つの拍手」という昭和の終わりから平成の初めに流行った集団作りの手法を用いました。実はこれにはわけがあり、話が飛びますが、先日、鳥居先生の机の上にあった学級通信をちらっと見たら、「ほんものは続く 続けるとほんものになる」という言葉が目にとまりました。東井義雄（1912～1991）の言葉です。東井義雄の考えのベースには浄土真宗の寺の生まれであるが故の部分があるので、決して押しつけはしませんが、私は教師生活2年目に東井義雄の著書に出会い、ずいぶん影響を受けました。よく使った言葉や資料に「私を私に育てる責任者は私」、「五千通りの可能性の中から」「バカにはなるまい」等がありますが、鳥居先生は「元服」という資料をよく使うとのことでした。そんな会話をしていたら、名内先生の机に「10代の君たちへ 自分を育てるのは自分（東井義雄、致知出版社）」が置いてあり、そのことでも会話となり、昔の教育実践がそれ以来、頭に残っていました。それで、突然「四つの拍手」という手法が浮かんだわけです。「四つの拍手」はみんなで拍手をすることにより、仲間意識が高まるということでも用いる先生もいますが、私は様々な自分を取り巻く大きな力に目を向けるきっかけとして用いてきました。是非とも、若い先生方にも東井義雄をはじめ、森信三（1896～1992）や徳永康起（1912～1979）、国語科なら大村はま（1906～2005）等の古い実践からも学んでほしいものです。

鳥居先生の学級通信にはアナザーストーリーがあります。私が目にした通信に2年生のミゲル君の苦勞と成長が名前は伏せて書かれていました。彼に見せたら喜んでいました。そんな彼がリレーのあと足が痛く、本部テントに来ました。小山先生の治療が終わり、テントを後にする前に「先生も手当てしてあげよ」と言い、彼の痛めた太ももにしばらく手を当てました。彼は笑顔で「ありがとう」と言って自席へ戻っていききました。少しはにかんでいましたが素敵な笑顔でした。 (2023. 9. 25)